

太平天国北伐軍の壊滅とその影響について

菊池 秀明

はじめに

近年の中国史研究における大きな変化は、新史料の発見によって歴史の具体像が明らかになった点であろう。とりわけ清朝政府の公文書である檔案史料の公開は、時代の要請に基づいた一面的な歴史認識の見直しを可能にした。太平天国運動（1850–64年）についても今こそ「革命の先駆者」あるいは「破壊者」といった従来の評価を超えて、客観的な立場からその実像を解明する必要が高まっている。

筆者は別稿において、太平天国が1853年5月から行った北伐の歴史について検討を進めてきた。北伐軍は黄河渡河後に懷慶攻略戦を行なって時間を浪費したりが、山西經由で直隸へ入り北京を驚惶状態に陥れた。彼らは天津郊外の独流鎮、静海県に進出して援軍の到着を待ったが、籠城を続けることで北京攻略のチャンスを失ったことを指摘した²⁾。

また前稿では1854年1月末に撤退を開始した北伐軍と援軍の活動について検討した。当初北伐軍は保定方面へ進出しようと図ったが、厳寒の行軍によって多くの将兵が凍傷となった。3月に北伐軍は再び東城村から阜城県へ移動したが、兵たちは雪融けの泥のために身動きが取れなくなり、僧格林沁の軍による追撃で大きな打撃を受けた。2月に太平天国首脳部は2月に曾立昌の率いる北伐援軍を安慶から出発させたが、この部隊は数千人の規模で、新兵が多かったため戦力は高くなかった。黄河を渡った援軍は直隸をめざしたが、途中捻子などの反体制勢力が加わると臨清府城の攻撃に執着した。4月に臨清が陥落すると、激しい略奪を行った新規参加者はもはや北上を望まず、逃亡者が続出した。さらに援軍が南下を始めると軍は統率が取れなくなり、清軍および団練の抵抗にあって壊滅した。この間阜城県で籠城を続けていた北伐軍本隊は、5月ようやく連鎮に至り、さらに李開芳の部隊を山東高唐州に派遣した。しかし援軍との合流は成らず、北伐軍は2カ所に分かれて清軍の攻撃を牽制する以外に手だてを失ったことを指摘した³⁾。

本稿は北伐軍が連鎮、高唐州で籠城を続けた1854年5月から、李開芳の軍が馮官屯で壊滅した1855年5月までの歴史を検討する。北伐の最終段階となったこの時期の歴史については、すでに簡又文氏⁴⁾、張守常氏⁵⁾、崔之清氏⁶⁾、堀田伊八郎氏⁷⁾らの研究がある。本稿はこれらの成果に学びながら、公刊された史料集、マイクロフィルム⁸⁾および台北の国立故宮博物院で筆者が収集した檔案史料を用いて分析を進める。また北伐の失敗が太平天国にもたらした影響について考えたい。それは太平天国の歴史を階級闘争史観から解き放ち、新たな

中国近代史像を構築するための一階梯になると思われる。

1. 連鎮、高唐州における籠城戦

(a) 高唐州における李開芳と勝保の戦い

まずは山東高唐州へ進出した地官正丞相李開芳の軍について検討したい。5月27日夜に連鎮を脱出した李開芳率いる630名は、29日に恩県から南へ向かい高唐州城を占領した⁹⁾。高唐の清軍守備兵は少なく、太平軍の進撃が早かったために警報も間に合わず、城は陥落して知州魏文翰らは殺された¹⁰⁾。太平軍の南進に気づいた勝保が騎兵2,800名を率いて追撃すると、李開芳は城門を閉じて立て籠もり、31日に勝保の軍と交戦した¹¹⁾。

勝保は追撃途中で捕らえた捕虜の供述から、この太平軍部隊が再び援軍を要請するか、山東へ進出して新たに兵力を募り、清軍を牽制する目的を持っていることを知った。また部隊の指揮官は李開芳で、林鳳祥は連鎮に留まっていること、「僅かに馬歩千余名に止まるが、みな精悍の徒であり、脅されて従った者はいない」¹²⁾とあるように高い戦闘力を持った精鋭部隊であることを把握していた。李開芳自身は軍を分けた意図について「官兵を牽制できる場所を一カ所選んで、声援の勢いをなそうと図った」¹³⁾と供述しており、複数の拠点を築くことで清軍の兵力を分散させようと図ったことがわかる。また彼は「我々が辰時（午前7時頃）に高唐へ到着すると、勝大人（勝保）は巳刻（午前9時頃）に官兵を率いて追いかけて来た」¹⁴⁾と述べており、高唐州に籠城したのは清軍の追撃が迅速だった結果であったことを示唆している。

この北伐軍の戦略は一定の効果を上げ、6月1日に連鎮の欽差参贊大臣僧格林沁は総兵孔広順率いる兵1,000名を大砲と共に高唐州の応援に向かわせた。この時彼は「現在官兵はすでに包囲するに足りず、我々はただ西北二方面を防衛することしか出来ない」とあるように、兵力が分散したために包囲網を形成できないと報告した。いっぽう咸豊帝は「現在両逆はすでに分かれ、首尾を顧みることが出来ない。まさに天が我に味方して賊を滅ぼす時が来たのだ」¹⁵⁾とあるように、北伐軍が二手に分かれた今こそ殲滅のチャンスと受けとめ、両軍を再び合流させてはならないと命じた。

高唐州城を占拠した李開芳は数百名の住民に命じて城外に濠を作らせ、清軍の進攻を防ごうとした。また東南西3面に柵や土塁を作り、木城を築いて防衛力を高めようとした。6月1日に臨清の戦いに参加した山東巡撫崇恩が2,500名の兵を率いて高唐州に到着すると、翌2日に勝保は攻撃をかけ、建設途中の柵や土塁を焼き払った。また彼は高唐州が「もとより富饒の地ではない」うえ、城内の食糧も知州魏文翰が処分したために残りが少なく、弾圧は容易であると楽観的な見通しを述べた¹⁶⁾。

ところが事態は勝保の予想通りに進まなかった。李開芳らは高唐州城の要塞化を進め、夜中に掘り進めたトンネルから城外に出ては数メートル幅の濠を築かせた。攻城戦に用いる呂公車を用意した清軍は6月10日に再び城を攻め、城下に達したが、太平軍の抵抗に遭って

把総蕭良芳が戦死し、70名以上の兵勇が死傷した。兵力不足と見た勝保は新たに吉林騎兵500名と砲兵の増援を求め、済寧州知州黄良楷の練勇1,000名を高唐州へ派遣するように要請した¹⁷⁾。また連鎮から届いた大砲を城の東北に据えて城内を砲撃させ、6月15日には崇恩、綏遠城將軍善祿、幫辦軍務德勒克色楞の兵および済寧勇に四方から攻撃させたが、西門外の木柵を焼き払ったに止まった。

白昼の攻撃は犠牲が大きいと見た清軍は、17日から夜襲に切り替えた。この夜川楚勇は城北の濠を越えたが、抵抗を受けて夜が明けても攻め入ることが出来なかった。すると太平軍200名がトンネルを使って城東へ出撃し、清軍と戦闘になった。東南でも太平軍が清軍の後方へ回り込んで攻撃をかけたが、清軍騎兵に追撃されると濠へ逃げ込んだ¹⁸⁾。

いっぽう清軍が攻城の準備を進めていることを知った太平軍も、6月18日から数百人が黒服姿で清軍陣地に夜襲をかけた。この戦いで城東の吉林兵陣地にいた營総托克通阿、城北砲台の二等侍衛恭鈺が殺された。21日にも城南、西の蒙古騎兵陣地が襲われ、蒙古兵10数名が死傷した。そこで勝保は各陣地に松明を配り、戦闘時には「かがり火を焚いて待ち受け、撃殺し易く」させた。また兵勇を太平軍の出撃路に待ち伏せさせた。はたして太平軍が夜襲をかけると、清軍は一斉にかがり火を焚き、騎兵と伏兵の攻撃でこれを撃退した。城北、城西の清軍陣地を攻撃した部隊も損害を受け、以後太平軍は「あえてほしいままに衝撲を行わなくなった」とあるように夜襲を控えるようになった。

その後連日の雨によって濠に水がたまり、清軍の攻撃ははかどらなかった。6月25日に勝保は呂公車がぬかるみで使えないため、ハシゴを用いて攻撃をかけさせた。清軍が数尺の濠を越え、城壁を登ろうとすると、城上の太平軍から激しい抵抗を受けた。戦闘は4時間に及び、候補把総葛太平と郷勇30名が戦死し、160名が負傷した。これ戦力の損失を恐れた勝保は、砲撃で太平軍を消耗させる戦略に変更せざるを得なかった¹⁹⁾。

これら一連の戦闘で勝利出来なかった勝保は、清軍將兵に護身具がないことを理由に挙げた。また高唐州城の食糧が残り少ないとした先の報告をくつがえし、食糧と武器が全て太平軍に奪われたため、「賊は要害の地に恃んで虫の息をつなごうとしている」と述べて知州魏文翰や清軍守備隊を非難した。さらに黄良楷の済寧勇についても、戦力になるのは1-2割に過ぎないと報じた²⁰⁾。

実際の戦況はどうだろうか。李開芳は「勝大人が我々を包囲すると、毎回官兵と戦ったが、夜間は我々に分があり、昼間は官兵が多く勝利した」とあるように、太平軍が夜襲、清軍が昼間の戦闘をそれぞれ優位に進めたと述べている。また「この時我々は食糧がなお多く、それほど脱出しようとは思わなかった²¹⁾」と述べており、李開芳らはかなりの食糧を確保していたことがわかる。

次に勝保の陣営にいた直隸按察使張集馨は、太平軍の高唐州占領後に「官軍は四面を囲んだが、賊は隠れて出ず、交戦のしようがなかった」と述べている。彼は攻撃を急ぐように提案したが、勝保は「兵が揃っていない」ことを理由に出撃を渋り、半月もすれば李開芳の首

を奪うことが出来ると言って従わなかった。また「この時は豊県の勝利後で、意気は傲慢となり、人の言うことを断じて聞き入れなかった」²²⁾とあるように、勝保は北伐援軍を壊滅させた功績に驕って他人の意見に耳を貸さなかったという。同じことは9月に勝保を弾劾した札科掌印給事中毛鴻賓も指摘している。彼によると勝保は「兵を擁して坐鎮し、独断独行」であり、崇恩が度々攻撃を促しても雲梯、呂公車の建設や砲台、土壕の修築などを先決として攻撃を引き延ばしたという²³⁾。この間にも李開芳らは高唐州城の要塞化を進めた。その結果について張集馨は次のように述べている。

賊は城外に深い濠を三重に掘り、城壁の下に暗門を開いて濠と通じさせた。また第一の濠から穴を掘って第二の濠、第三の濠とつないだ。濠の中には賊匪十数名が隠れており、官軍が発砲しても命中しなかった。逆に兵勇が溝を越えれば、賊は矛で斬りかかるか、小さな槍で襲いかかり、逃れられる者は僅かだった。城門は開いたり閉じたりして、賊が行き来するのがよく見えたが、兵勇は前に進むことが出来なかった。

勝帥（勝保）は賊が宵のうちに逃げることを恐れ、毎晩騎兵、歩兵や練勇を見張りに立たせた。賊は官軍が疲労している隙をうかがい、騎兵の後方に回り込んで火弾を投げ込んで、騎兵が驚き逃げたところを殺した。歩兵が少しでも注意を怠ると、賊はすでに蛇行して進み、にわかには防ぎきれず殺された。数月以来、兵勇が殺されない日はなく、新月の闇夜は被害が大きかったので、将兵はみなこれを恐れた。

賊は毎晩附近の村莊へ至って食糧を奪った。川楚の壮勇には賊に通じる者がおり、官軍の動向は全て賊に知られたが、官軍は賊の動きをつかむことが出来なかった。²⁴⁾

ここからは太平軍が高唐州城外に3重の濠を築き、夜襲によって清軍を悩ませた様子が窺われる。また太平軍は清軍陣地の後方に回り込むだけでなく、城の郊外へ出かけて食糧を集めたとあり、清軍の包囲が実効を伴っていなかったことがわかる。それを可能にしたのが太平軍に清軍の情報を流した四川、湖南出身の壮勇で、彼らは臨清攻防戦でも太平軍との内応を指摘されていた。毛鴻賓によると、7月に黄良楷の濟寧勇は風雨に紛れて密かに州城の城壁を登った。だがこの時勝保の陣地から砲声が響き、攻撃に気づいた太平軍は城上の壮勇を殺したため、「以後ついに再びあえて登る者はなくなった」²⁵⁾という。

こうした批判や告発に対して、後に革職擧問の処罰を受けた勝保は反論を行っている。それによると高唐州の太平軍は「一味死守」であり、「百計を案じて戦いを誘っても、該逆は堅固な城を拠り所とし、ただ死守をもって長技とした」とあるように清軍の誘いに乗らなかった。また勝保が周囲の進言を聞き入れなかったとの批判については、「兵勇の死傷者が多すぎたため、崇恩が勝保に向かって攻撃の中止を勧め、暫く兵を休ませたことはあったが、いまだ崇恩が催促するのを聞いたことはない」²⁶⁾と否定している。

また勝保によると、彼の率いていた歩兵は2,400名に過ぎず、4,000名以上を連鎖に残し

たままだった。そこで騎兵を用いたが、彼らは夜間の陣地戦に不慣れで、7月18日にも太平軍の夜襲によって大きな被害を受けた²⁷⁾。加えて7月8日から22日にかけて雨が続き、平地でも2-3尺の水が溜まったため、清軍は松明や火器が使えずに苦戦した²⁸⁾。勝保は人夫を集めて城の周りに土塁と濠を築かせると共に、騎兵と歩兵を交互に布陣させて騎兵の損害を抑えようとした²⁹⁾。また山東各地の囚人から武芸に通じた者100名を集め、彼らに「賊を殺して贖罪」³⁰⁾させることにした。

8月7日に吉林騎兵が損害を出したとの知らせを聞いた咸豊帝は、勝保が「驕矜の故習」によって準備を怠り、偽りの報告をしていると叱責した³¹⁾。この日勝保は7月24日に続いて2度目の総攻撃をかけたが、「城上の賊の守りは甚だ厳しく、兵勇の傷亡もすでに多くなった」³²⁾ために軍を退却させた。彼は過去7回の攻撃で数百名を超える死傷者が出た理由として、天候不順や高唐州城が難攻不落の「堅城」であることに加え、「(北伐軍の) 精悍は全て高唐にあり」³³⁾とあるように李開芳軍の戦闘力の高さを強調した。また「その逆首は親しく南賊を詣でて救援を求め、再び北犯を図っている」³⁴⁾とあるように、李開芳がなお新たな援軍を得て北進することを諦めていないと指摘した。

さらに勝保は捕虜の供述から、「賊匪は官兵によって度々殺されたのを除き、なお真賊が五百余人、脅されて従った百姓が六、七百人いる。現在は大兵に激しく攻め立てられ、人々は皆守っても他所へ行っても死は免れないと密かに話し合い、隙を見て逃げ出そうと思っている。その仲間は疑心暗鬼となり、脅された者たちも賊を殺してやりたいと考えている。賊首はなお反逆を考えているが、人々の心は久しからずして自ずと乱れるだろう」と分析した。そして高唐州城で商業を営んでいた李啓昌を城内へ潜伏させて内応工作を行わせた³⁵⁾。また彼は手持ちの大砲では威力が弱いと、新たに「爐匠」を招いて1万5-6,000斤の巨砲を鑄造し、その完成を待って攻撃をかけると報じた。だが咸豊帝は「万余斤の大砲は接近戦の道具ではない」「これを口実に時間を引き延ばすとは、断じてあってはならないことだ。たとえ完成して砲撃出来たとしても、どうやって臨機応変に活用すると言うのか？」³⁶⁾とこの作戦を非難し、勝保の花翎を取りあげる処分を命じた³⁷⁾。

結局のところ勝保は有効な手だてを見いだせないまま、8月20日に3度目の総攻撃をかけて150名以上の死傷者を出した³⁸⁾。また9月4日には州城の東関付近に新しい陣地を構築させ、小型砲を運び込んで城内を砲撃したが、作業に当たった壮勇や人夫数十名が死傷した³⁹⁾。相次ぐ損害に清軍の士気は低下し、勝保も一旦は取り戻した咸豊帝の信頼を失った。いっぽう李開芳軍は8月27日夜に城の東北から出撃したが、清軍に撃退された⁴⁰⁾。李開芳自身も「屢々外へ打って出たが、どうしても敵を破ることが出来なかった。全部で三十回以上も戦った」⁴¹⁾と述べている。さらに南進の経路を探ったり、連鎖の林鳳祥軍に高唐州への移動を促すために派遣された密偵もことごとく清軍に捕らえられた⁴²⁾。彼らも膠着した戦況を打開する術を持ち合わせていなかったのである。

(b) 連鎮における林鳳祥軍と僧格林沁

さて連鎮に残った林鳳祥の本隊 6-7,000 名は、僧格林沁の率いる大軍を相手に籠城戦を続けていた。陳思伯『復生録』および清軍の作成した地図（図 1）によると、彼らは運河の兩岸に広がる連鎮の街を二つの浮橋で繋ぎ、周囲に濠と土塁、木城を築いた。また連鎮から 1.5 キロほど離れた三里莊、韓家莊、趙陳富莊に陣地を築き、連鎮との間を塹壕で結んで行き来した。さらに濠の底には桐油で防腐加工をした竹バラを敷きつめ、外側には木の枝を縄で繋ぎ、上に銅の鈴を吊したバリケードや落とし穴、地雷を仕掛けたという⁴³⁾。

こうした防禦工作は効果をあげ、清軍は連鎮への攻撃に苦しんだ。僧格林沁は 6 月中旬の上奏で「逆匪が初め村鎮に拠った時は、壁壘も堅くなく、歩兵でも攻撃しやすく思われた。だが各軍の歩兵は騎兵に比べて苦勞が多く、身を危険にさらすために死傷者も多く、時と共に怯えて、敵を前に尻込みして模様眺めをするようになった」「現在各軍は賊の陣地から一、二里に迫っており、槍炮の届く距離にいるが、実にこれ以上近づくことは難しい⁴⁴⁾とあるように、攻城戦の主力となるモンゴル八旗の歩兵部隊に多くの損害が出ていると報じた。すると咸豊帝は命令に従わない者は満洲、モンゴル旗人か綠營漢兵かの区別なく、厳しく処罰して軍紀を引き締めるように命じた⁴⁵⁾。

この命令を受けた僧格林沁は夜襲を検討すると共に、守りの手薄な東南に欽差倉場侍郎慶祺の兵 2,500 名を配置した。また 6 月 21 日には「奮勇の官兵」を派遣して濠を埋めさせようとしたが、これを阻もうとした太平軍と戦闘になった⁴⁶⁾。続く 6 月 24 日の戦闘では副都統達洪阿が負傷（7 月に死亡）し、30 名以上の死傷者を出した⁴⁷⁾。結局のところ清軍が採用したのは阜城県攻防戦の時と同じく、陣地の周囲に長い濠を掘り、土城を築いて包囲する戦略だった⁴⁸⁾。これに対して咸豊帝は長濠を作っても包囲を厳密にしなければ阜城の二の舞になると述べた⁴⁹⁾。また包囲戦は時間と経費を浪費するだけで、安徽や湖北の西征軍が北上した場合、これを防げなくなるとの懸念を表明した⁵⁰⁾。

すると僧格林沁は 7 月 7 日の上奏で、太平軍が西連鎮の高台を占拠していることが苦戦の原因であると指摘した。また林鳳祥軍が運河を利用して他所へ進出する可能性も否定出来ないとしたうえで、山東徳州の南にある四女寺鎮で運河の水を引き込み、太平軍陣地の周囲を水没させることを提案した。さらに濠の外側約 14 キロに水を防ぐ堤防を建設する必要がある、東光県知県葉増慶らに住民を動員させ、工費を抑えろと述べた。

この僧格林沁の戦略について、咸豊帝は「水で囲むのはもっぱら彼らが逃げるのを防ぐだけで、その死命を制することにはならない。今は速やかに戦いを進めるべきなのに、なぜ反対に彼らが出てこられないようにするのか？」⁵¹⁾と述べ、この水攻めを労多くして無益な戦法であると非難した。だが僧格林沁はこれが「愚かな計画」であることを認めながらも、林鳳祥軍が 2ヶ月近く「死守して出でず」であり、清軍の死傷者も多いため、やむをえず「重隄を掘り築き、水をもって兵となすことで、別に攻撃の法を講じる」と主張して譲らなかった。また毎日数万人の住民を動員して堤防を建設しており、7 月下旬には工事が完成すると

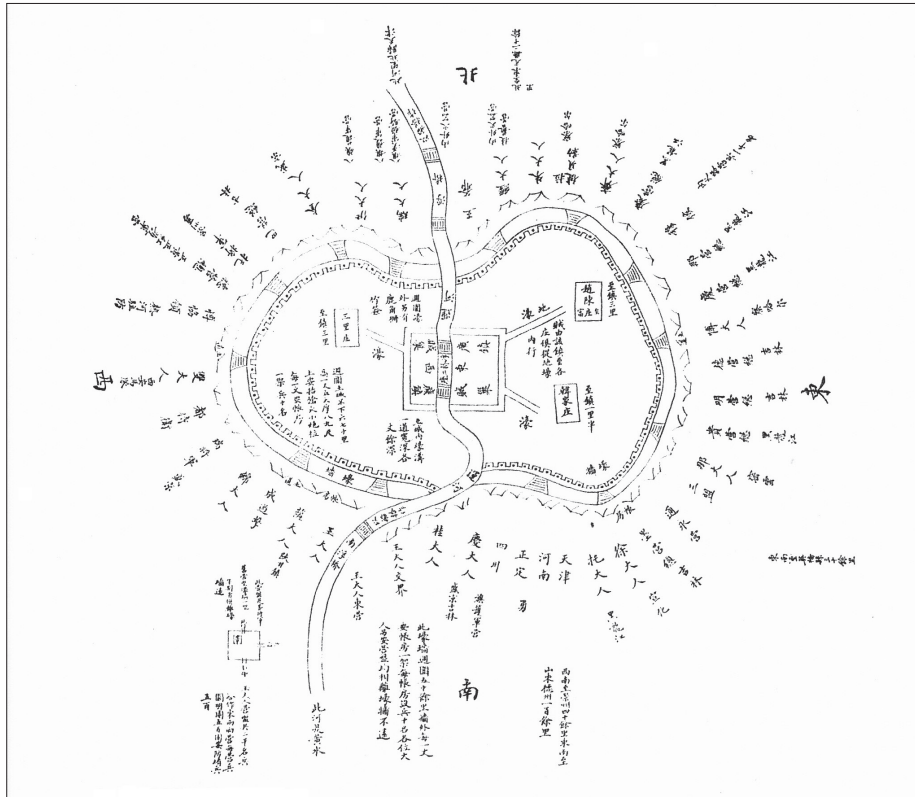


図1 清軍の連鎮における太平軍包囲図
軍機處檔案・謝興堯氏所藏。張守常氏の整理による。『太平軍北伐資料選編』所収。

の見通しを述べた⁵²⁾。

はたして7月21日に連日の大雨により、連鎮南側の運河の堤防が決壊した。水は太平軍が占領していた陳莊や南側の小村に及び、太平軍将兵は土塁の上へ避難するか、連鎮へ退いた。また濠の周囲に堤防を築く工事が完成していなかったため、連鎮東側の清軍陣地も水没した。僧格林沁は「船を取り寄せて、東側に暫く水營を設けた」とあるように船を用いて包囲を続けると共に、德州に人を派遣して運河の水量を調節させた⁵³⁾。

このように僧格林沁の水攻め計画は図らずも実現した。その後完成した濠の総延長は50キロに及び、深さ、広さは共に3メートルほどであった。また水を防ぐために濠の外側に高さ5メートル、幅2メートルの土城が30-35キロにわたって築かれた⁵⁴⁾。そしてこの水攻めは林鳳祥軍に大きなダメージを与えた。氾濫によって東連鎮に貯蔵していた米の多くが失われ、食糧不足に陥ったのである。

8月初旬、林鳳祥軍の陣地から連日太平軍将兵の死体が流れてきた。清軍が調べたところ、太平軍内では「米麦が漸く足りなくなり、現在は黒豆を食べている。馬の飼い葉は最も不足している」とあるように食糧事情が逼迫し、脱走を図った兵士が捕らえられて殺され、

その死体が運河に遺棄されたことがわかった。また林鳳祥は「連鎖に官兵はおらず、郷勇が周囲を包囲しているだけだ」と言って将兵を落ちつかせようとしたが、「賊衆は心が次第に離れ、日々懼れおののいた」と動揺を抑えることは出来なかったという。

これ以後林鳳祥らは連鎖からの脱出を図り、清軍の防備が弱い部分をねらって攻撃をくりかえした。8月18日に連鎖西にある侍衛都興阿の陣地⁵⁵⁾、21日には杭州將軍瑞昌の陣地を攻撃し、23日には風雨に紛れて西南の都統綿洵らの陣地を襲った。また26日には「大股が撲出」して都興阿、護軍參領德亮の陣地を攻め、運河の水位が下がった27日夜にも副都統明慶、護軍參領舒保の陣地を襲ったが、いずれも清軍に撃退された⁵⁶⁾。

8月30日夜に太平軍は船で連鎖東側の護軍統領珠勒亨らの陣地に迫り、長ハシゴと火弾、噴筒で攻勢をかけた。清軍が太平軍の火薬船を爆破すると、太平軍は退却した。また残された「真正粵匪」の遺体を解剖したところ、胃の中はみな黒豆、高粱で、米不足に陥っていることが確認された⁵⁷⁾。僧格林沁は運河西側にある清軍陣地の濠の幅を広げ、その外側に落とし穴を幾重にも設けるなどの措置を講じた。また運河東側の濠の外には木椿（杭）を設け、太平軍の船や筏を防いだ。

しばらく夜襲を控えていた太平軍は、9月14日夜に南の慶祺、西の瑞昌の陣地をそれぞれ襲撃した。とくに瑞昌の陣地を攻めた一隊は長梯子をかつぎ、籐牌を手に火槍を放ちながら「捨死不退の勢い」で攻めた。清軍がこれを撃退し、捕虜を訊問したところ、「逆衆は囲まれて焦っている。また現在は米が少なく、先に一人毎日初一斤八両だったものが減じて一斤となった。現在は一人毎日初十二両で、僅かに精米六両にしかならず、一日の食用に足りない。黒豆、緑豆を混ぜてなんとか飢えをしのいでいる。逆首林鳳祥は厚い包囲網を突破して、高唐の賊匪と会合したいと願っている」と供述した。またこの日の戦いで太平軍は130名以上が死亡し、「逆衆は互いに怨みを抱き、人心は乖離している」⁵⁸⁾と人々の不満が高まったという。

9月20日以後運河の水量が増し、河東の水深は3メートル近くなった。太平軍は四部隊を出して清軍の様子を窺っていたが⁵⁹⁾、清軍は投降した太平軍兵士の供述から、林鳳祥らが船を使って脱出する計画を立てていることを知った。はたして9月24日夜に太平軍が出撃し、清軍の注意を引いていると、別の一隊が大船4隻、筏十数隻に乗って姿を見せた。清軍が攻撃すると、太平軍の船はなお前進したが、木椿に行く手を阻まれて清軍陣地に近づくことが出来なかった。清軍はこれに集中砲火を浴びせ、大船1隻を撃沈し、もう1隻を炎上させた。太平軍の船は敗走し、翌日「専ら水隊の船を率いていた」水官総制廖姓（広西賊匪）の遺体を確認された。

僧格林沁はこの2ヶ月で太平軍は10度攻勢に出たが、悉く清軍に撃退されたこと、白昼や満月の時は活動せず、闇夜や風雨の夜に決まって攻撃をかけてくると述べた。また彼らは食糧が少なく、支給される初も1人当たり4両に減ったと報じた⁶⁰⁾。

林鳳祥はこの時期の戦いについて何も述べていない。だが陳思伯は清軍が長濠を構築した

当初、林鳳祥は包囲が厳しいとは思わず、屢々清軍陣地を攻撃させたが、すぐに撃退された
と述べている。また10月に林鳳祥は將軍鄭阿培に西北の清軍陣地から1キロの地点に小さ
な陣地を築かせ、ここに大砲を据えて清軍を攻撃させた。だが清軍も昼夜となく砲撃で応戦
し、3ヶ月もたたないうちに5-600人の死者が出た。眠ったまま朝には頭を失っている者、
弾丸が脇から入り、毒が回って息絶えた者、一発の砲弾で数人が犠牲となり、破片で身体を
えぐられる者など、その戦いは凄惨を極めた。陳思伯は負傷兵の治療に当たったが、彼ら
の中で助かる者はなく、傷口の腐爛臭が鼻をついた。彼は兵の苦しむ声を聞くに忍びず、夢
中で治療するうち砲撃にも動じなくなってしまうという⁶¹⁾。

9月末から林鳳祥軍は食糧を補うために、数人ずつ陣地の外へ出てきて「高粱を割取」す
るようになった。そこで10月1日に僧格林沁は「歴次投誠の人」即ち投降した太平軍兵士
と元漕運總督李湘棻の率いる練勇400名に命じて、青草や高粱を刈り取る振りをさせた。
すると太平軍は騎兵、歩兵数百名が出撃してこれを防ごうとしたが、清軍の伏兵に襲われて
多くの死者を出した。また2日には白昼清軍陣地を攻撃して失敗した。僧格林沁は昼夜の
区別なく攻撃をかけてくるのは林鳳祥が焦っている証拠だと考えた⁶²⁾。

10月15日に林鳳祥軍は南の慶祺、桂齡の陣地を攻撃したが撃退された。翌16日に太平
軍は2手に分かれて僧格林沁の本陣を襲い、鹿角柵に迫って火炎弾を投げ込んだ。清軍が
警戒していると、別の一隊が木梯子を担いで前進し、鹿角柵の前に潜伏した。数時間後に彼
らは攻撃をかけたが、清軍の迎撃を受けて敗走した⁶³⁾。その後も太平軍は毎夜突撃のチャン
スを窺っていたが、清軍が隙を見せないと後退した。また10月26日に再び僧格林沁の陣
地に対する攻撃が失敗すると、連鎖から多くの難民が逃げ出してきた。彼らは「賊匪は屢々
被害を受け、非常に焦っている。加えて食糧が足りず、黒豆しか食べるものがなく、死ぬ覚
悟で攻撃しようと急いでいる。現在賊巢では呂公車二十余座を製造し、初十日(10月31
日)前後に北の私、僧格林沁の陣地に決死の攻撃をかけようとした⁶⁴⁾とあるように、近
く太平軍が総攻撃をかけると供述した。

ところがその後林鳳祥軍には動きがなく、11月3日に僧格林沁は太平軍陣地に攻撃をか
けてみた。すると突然別働隊が出撃して、清軍の後方へ回り込もうとした。清軍がこれを撃
退すると、太平軍は再び連鎖に立て籠もり、清軍が攻撃しても「一人として匪巢から出てこ
ない」とあるように誘いに乗らなかった。その理由を難民に尋ねたところ、「賊の陣地が作
った呂公車は、前に推すのは簡単だが、後退させるのが極めて難しく、深い壕を越えられな
い」と述べた。僧格林沁は太平軍が呂公車を完成させたものの、「あえて軽々しく試さない
でいる」と推測した⁶⁵⁾。この呂公車について陳思伯は次のように述べている

林逆(林鳳祥)は策に窮して、ついに3メートル余りの長バシゴを造った。両側には
大きな鉄鉤をつけ、梯子の先には人が入って火球を放つことが出来る木箱を据えた。
また下には大きな車輪二つと橋のような長い板バシゴがあった。城壁の近くまで推して

行き、車輪で溝を埋めると、長バシゴを立てて城上に鉤をかける仕組みになっていた。また賊は板バシゴから上に登り、城壁を登って攻撃することが出来た。この車は二度用いられ、官軍は深い打撃を受けたが、幸い一回しか使うことが出来なかった。おそらく車が濠に落ち込むと、再び取り出すことが出来なかったためだろう。⁶⁶⁾

ここからは林鳳祥軍の造った呂公車がかなりの攻撃力を備えながら、起伏の多い地形では移動が困難だったことが確認される。実際に 11 月 14 日に太平軍は瑞昌の陣地に迫ったものの攻撃せず、翌日多くの木板が漂流してきた。清軍が調べたところ、太平軍は製造した呂公車が役に立たないと見て破壊したという⁶⁷⁾。

また僧格林沁は難民の供述から、太平軍に堤防を決壊させて船で脱出する計画があることを知った⁶⁸⁾。そこで警備を強化させたところ、11 月 17 日夜に太平軍は水陸両軍に分かれて出撃した。「水路の賊匪」は 5 隻の大船が中心で、船の周囲には木や鉄の盾を立て、舳先には呂公車から転用された長バシゴを備えていた。彼らが清軍陣地に近づくと木樁に遮られたが、バシゴの先に火弾をつけて一斉に渡ろうとした。清軍が発砲すると、バシゴを渡っていた太平軍兵士が水に落ち、船上の兵士は盾で身を隠した。清軍がなお攻撃すると、大小の船が濠に向かって突撃したが、清軍が船隊の後方に砲撃を加えると退却した。この日太平軍は偽將軍葉姓など 100 名以上が戦死したという⁶⁹⁾。

このように林鳳祥はくり返し清軍陣地に攻撃をかけたものの、包圍網を破ることはできなかった。むろん 10 月 22 日の上諭で咸豊帝が「奇策で勝利しようとする部分が全くない」⁷⁰⁾と批判したように、僧格林沁も積極的な進攻作戦を取れた訳ではなかった。だが咸豊帝の叱責を受ける度に無理な攻撃で犠牲を増やし、いたずらに人々の反発を買った勝保と比べた場合、モンゴル貴族として不動の地位を築いていた僧格林沁には「逆匪は布置が堅く厚く、防守が甚だ厳しいため」「万にやむを得ず、この包圍によって剿捕に代える計をなしている」と咸豊帝の性急な命令をかわずだけの余裕があった。

11 月下旬になると、太平軍將兵の中には攻撃中に跪いて「撃たないでくれ！投降する」⁷¹⁾などと叫ぶ者が現れた。投降兵の 1 人だった施肇恒（湖北江夏県人）から李開芳が帰還時に知らせる暗号を知らされた僧格林沁は、匭部隊を使って「高唐の匪が救援に戻ってきたと見せかける」計略を思いついた。彼は李開芳らが呉橋まで戻ってきたとのデマを流し、12 月 9 日に清軍陣地に黒煙を上げさせた。また同じく投降兵だった寧宗陽に黄旗を持たせ、林鳳祥軍の陣地に近づいて「高唐州から救援にやって来たぞ」と叫ばせた。これを聞いた太平軍陣地では「歓声が沸騰」し、南面の木城にいた太平軍に続いて連鎮の本隊も援軍を迎えるために出撃した。清軍がこれを引きつけて発砲したところ、太平軍は「紛紛として地に倒」れた。ようやく計略に気づいた太平軍は仲間の遺体を担いで撤退し、泣き叫ぶ声は野を震わせたという⁷²⁾。最早戦局は林鳳祥軍にとって絶望的なものになりつつあったのである。

2. 北伐軍の壊滅とその影響

(a) 連鎮における林鳳祥軍の壊滅

高唐州からの救援と見せかけた僧格林沁の圍作戦で打撃を受けた林鳳祥軍は、しばらく「潜匿して出でず」と清軍の誘いに乗らなかった。12月20日に太平軍は西南の清軍陣地を攻め、その後も小部隊での攻撃をくり返したが、いずれも清軍に撃退された⁷³⁾。1855年1月11日に雪が降ると、翌12日に太平軍は氷上を滑って連鎮西側にある都興阿の陣地を攻めたが、清軍の反撃によって160名以上の「長髪の老賊」⁷⁴⁾が死傷した。

この戦いの後、林鳳祥軍の防備は益々堅くなったが、それは清軍の攻撃を防ぐだけでなく、「人心が固まらず、他変が生ずるのを恐れて、昼夜守りを厳しくしている」とあるように動揺した將兵による内応を警戒しているようだった。12月下旬から「兩湖、江南、安徽、河南、山東および地元の民人」60余名が投降したが、その一人で両司馬の朱有長（湖北人）は「最近『投降すれば死を免じる』と記した告示を見、また降伏した者が殺されず、褒美を得た者もいるのを見た。そこで喜んで投降し、賊を殺して手柄を立てたいと願った」と供述した。また彼らは「近日林鳳祥は各地で逃亡者を探し出し、これを連れ戻しては殺してさらし首にしている。現在賊巢では黒豆、豆餅、騾馬を含めて一ヶ月分の食糧しかなく、林逆はみずから生き残る道がなくなったことを知って、ただ涙を流して嘆き悲しんでいる」⁷⁵⁾とあるように、林鳳祥は逃亡兵に厳しい処罰を加えているが、食糧が底を尽きつつあり、活路を断たれて絶望していると述べた。

陳思伯によると、太平軍では「秘かに逃走を議する者は、何人であろうと先に殺し、後に報告せよ」という厳しい命令が出ていた。また城外の望楼には4色の大旗が置かれ、東側で有事があれば紅旗を、西側に脱走兵が出れば白旗を掲げて城内から追撃したという。さらにこの時期のこととして、陳思伯は次のように記している。

十一月（12月下旬）になると、突然中營にいた愚かな火夫の李姓なる者が、もとより字も知らなかったが、みずからイエスの降臨だと名乗り、林逆を守って囲みを脱出させると言い出した。林逆は深く信じ、彼のために軍師府を設けて手厚くもてなした。初めのうち作戦を言えば、不思議にも全ての的中した。そこで数百人を選んでその指揮に従わせ、毎日龍門、八卦などの陣法を訓練させたところ、効果があるように思われた。彼はいつも高台に立ち、林逆に跪いて道理を説き明かすのを聞くように命じたが、林逆は命令に従ってこれを聞いた。だが一ヶ月ほど経っても功績を上げられず、かえって何度となく多くの兵を失ったため、林逆はそれがデタラメであったことを憎み、正副の軍師をみな斬り捨てた。⁷⁶⁾

ここでは李姓なる男がかつての西王蕭朝貴と同じく天兄イエスの下凡を行い、林鳳祥はこれを深く信じたとある。その真偽を確かめる術はないが、彼が指揮した数百人の兵について

は、投降兵の供述書に「林鳳祥は奮勇なる者千余名を選び、突撃に備えている」⁷⁷⁾とある。林鳳祥は毎夜連鎖から脱出するルートを探らせ、この1,000名の決死隊に「驟馬を屠って」褒美を与えた。彼らは「それぞれが決死の覚悟で、一斉に撃って出よう。もしうまく行かなくても、皆で揃って濠辺で死のう」と誓い合ったという。

1月16日夜に決死隊は瑞昌の陣地を攻撃し、バリケードに阻まれながら「あえて捨て身で煙の中を進んだ」と前進した。だが清軍は高所から攻撃を加え、綿洵、徳亮の軍と李湘棻の練勇が左右から夾撃したところ、彼らは「四面に敵を受け、どうしても抵抗できなくなり、ようやくよるめきながら敗退した」と多くの死傷者を出して敗走した。翌17日から21日まで突撃はくり返されたが、地雷を踏んで爆死する者も多かった。また投降する者が120名ほどおり、先に降伏した者と併せてその数は200名を超えた。

1月20日、21日に僧格林沁は施肇恒（六品頂戴）率いる投降兵を太平軍陣地の近くまで前進させ、「叫び罵」らせて太平軍を挑発した。太平軍が出撃すると、彼らはこれを攻撃し、清軍の支援を受けて「黄衣賊匪」の検点黄益沅（広西博白県人）を殺害した。この黄益沅は太平軍の中で「狡猾兼全の人」であり、陣地の配置や武器の製造、出撃に至るまで林鳳祥の厚い信頼を得ていた。彼の死は「林逆はこの一人を失って益々落胆した」⁷⁸⁾とあるように林鳳祥にとって大きな損失だった。

また僧格林沁によると、この頃の林鳳祥軍は両広人と途中参加した囚人1,000名余りが中核となっていた。また湖南、湖北人（湖広人）はこれまでの戦いで「傷亡が多過ぎた」うえ、施肇恒らが清軍内で良い待遇を受けているのを知って動揺していた。そこで林鳳祥は内応を防ぐため、「権詐」によって将兵の心をつかもうと一計を案じた。1月22日にある脱走兵が捕らえられると、林鳳祥は彼を殺さず、自らの無能によって皆を苦しめたと自己批判して、銀20両を与えて立ち去らせた。これを知った僧格林沁は「林逆一犯は実に詭詐百出であり、まさにこの万分窮蹙の時にあっても、なおかくの如く狡猾なのは、実に尋常の賊犯と比べることが出来ない」⁷⁹⁾とあるように、林鳳祥が絶望的な状況でも優れた統率力を見せていると評価した。

1月26日に林鳳祥は連鎖西北の小村から兵を退かせ、東西連鎖に兵を集中させて脱走を防ごうとした。だが「両湖人と林鳳祥はようやくすでに乖離」とあるように、湖広人将兵の多くは命令に従わなくなった。これを見た僧格林沁が「投誠する者は武器を持たなければ受けられない」という告示を出すと、800名余りが武器を持って投降した。僧格林沁は彼らを薙髪させ、勇敢な者を清軍陣地に留めた。続いて「投誠する者は共に広西人の首を持つてくること」との告示を出すと、1,000名余りが投降したが、彼らは広西人の首を持っていなかった。そこで僧格林沁は彼らの薙髪を許さず、濠の中に新たに陣地を築いて、警備や太平軍陣地への襲撃を行わせた⁸⁰⁾。

このように大量の投降兵が出るようになった理由は、「乙卯五年正月初二日（2月6日）に賊内の聖糧館はすでに食糧がなくなり、食糧を支給出来なくなった」とあるように食糧の

途絶にあった。湖広人の将兵たちは騾馬を屠り、皮の箱や刀の鞘を煮て飢えをしのぎ、スベリヒユや雑草、木の皮を研いで麺にして食べた。さらに捕らえた官兵や逃亡兵を殺してその肉を食べたが、「この時も偽天朝將軍以上の各館にはなお麦、豆などの食糧があった」とあるように広西人幹部との間には待遇に大きな差があった。

陳思伯も長く助け合ってきた同郷の曾廷達と太平軍陣地を脱走し、追撃を振り切って清軍陣地にたどり着くと、施肇恒に伴われて僧格林沁に面会した。この時僧格林沁が「賊衆はなぜ逃げないのか？」と尋ねると、陳思伯らは太平軍内では「逃げた者は惨たらしく殺される」と言われており、「死を免じる」と記した旗を持って知り合いの将兵に呼びかければ、必ず皆信じて投降すると答えた。すると僧格林沁は「投誠する者は死を免ず」と記した白旗4面を与え、施肇恒、周隆廷に護衛をつけて陳思伯と共に投降を呼びかけさせたところ、2日間で360名余りが投降したと述べている⁸¹⁾。

こうして投降した太平軍の湖広人将兵について、僧格林沁は次のように述べている。

現在投降した者は二千余名いるが、私たちが慎重に観察したところでは、共にやむをえず賊に従ったのであり、現在投降して、賊を殺して功績をあげたいと思わない者はいない。しかもこれらの義勇は林逆のもとで百戦錬磨の者たちであり、毎回賊と戦う度に、身のこなしは極めて敏捷である。そこで戦闘で力を出した者には、薙髪、衣服、銀両の三等からなる褒美を出すことにすれば、彼らは皆急ぎ手柄を立てて長髪をやめようとするに違いない。

ここから僧格林沁は投降した太平軍将兵の戦闘力を高く評価し、彼らを義勇として積極的に活用したいと考えていたことがわかる。また彼は太平軍内に詹起倫（湖北人）なる人物がおり、「人は極めて強悍で、謀勇を兼ね備えており、林逆が最も頼りにしている」ことを知った。そこで僧格林沁が投降を勧める手紙を送ると、詹起倫は林鳳祥の嫌疑を受けて2月13日に投降した。だが僧格林沁は彼の本心を試すために投降の遅れを責め、笞刑のうえ「急ぎ功績を立てて贖罪」するように命じた⁸²⁾。2,000名の義勇は前後左右中の5軍から編制され、先に投降して手柄を立てた者が哨官に任命されたという⁸³⁾。

2月8日に僧格林沁は「投誠勇目」の施肇恒、寧宗揚、周隆亭、劉正発らに、義勇を率いて太平軍陣地を攻撃させた。慶祺の陣地にいた王有明、林思謨率いる義勇も韓家湾の太平軍陣地を攻撃し、木城に突入してこれを焼いた。また西連鎖では寧宗揚、劉正発が北側、施肇恒、周隆亭が西側から攻め、白兵戦の末に見張り櫓などを焼き払った。

2月12日に僧格林沁は全軍に攻撃を命じ、「その巢を破らない限りは撤退を許さない」と命令した。王有明の義勇1,000名は清軍の支援を受けて東連鎖を攻めたが、防禦が固く攻め落とすことが出来なかった。また施肇恒らの義勇600名は西連鎖を攻めた。西連鎖には4つの太平軍陣地があり、2重の濠やバリケード、落とし穴が設けられていた。義勇は太平軍

陣地に迫り、柵を引き倒して前進すると、噴筒、火弾を投げ込んで火災を発生させた。彼らが陣地内へ攻め入ると、清軍がこれに続き、「連鎮街内には賊の屍が枕を並べ、屋内で焼死する者も数え切れなかった」とあるように多くの太平軍將兵が殺された。義勇が3つの陣地を占領するのを見た林鳳祥は、「強悍の賊」を率いて残る1つの陣地へ渡り、必死で抵抗した。夕方になって清軍は撤退したが、この戦いで清軍の死傷者は数名に対して、義勇の死者は10数名、負傷者は200名余りにのぼった⁸⁴⁾。

僧格林沁はこの戦いで活躍した義勇について「なお信頼できる」⁸⁵⁾と評価し、その後の投降者も含む3,000名に攻撃を続けさせた。その結果2月17日に西連鎮が陥落すると、清軍は運河沿いに陣地を構築し、大砲6門を据えて東連鎮への攻撃を継続した。林鳳祥軍は「現在賊匪は二千名を下らず、死党を結成して連鎮の片隅に集まり、木城を幾重にも造って必死になって抵抗している」とあるように、なお2,000名以上が残っていた。だが2月18日には林鳳祥のもとで「画策を主謀」していた蕭鳳山（アヘン戦争時に浙江で軍功をあげた保拳県丞、四川人）、鍾有年（元生員、安徽人）が捻匪、水手91名を率いて投降した。すると僧格林沁は「真心からの投降であるとしても、罪は赦しがたい」として2人を凌遲処死にし、続いて投降した600名も全て処刑した⁸⁶⁾。陳思伯によると、この時期投降した者たちは墓から掘り出した死体を分けて食べていたという⁸⁷⁾。

3月7日に東連鎮はついに陥落した。2月19日以後、清軍はくりかえし攻勢をかけたが、太平軍の抵抗によって義勇の死傷者は900名を超えた。そこで僧格林沁は3月5日、6日と攻撃を抑制し、太平軍を安心させうえて攻略する戦法をとった。これは効果をあげ、7日に清軍と義勇が南北から進攻すると、木城が破られて太平軍は支えきれなくなった。太平軍將兵の多くは運河に飛び込むか、木城から脱出しようと試みたが、1人残らず殺された。林鳳祥も重傷を負ったが、彼の遺体は発見できなかった。そこで捕虜に尋ねたところ、陣地の地下に坑道があることがわかった⁸⁸⁾。この坑道の搜索について陳思伯は次のように記している。

王（僧格林沁）が「誰か先に下りる者はいないか？」と問いかけると、施肇恒はかつて林逆（鳳祥）の厨房で働いていたことがあり、面識があるので自分が行くと応じた……。彼が地下に潜って一時余り、外に出てくると、王は大変喜んで坑道の様子を細かく尋ねた。施肇恒の話によると、地下には灯りやベッド、器具が揃っており、一月分の食糧も残っていた。偽検点、指揮、將軍、総制、監軍、軍師などの將校が全部で三十名ほどおり、みな刀を手に彼を殺そうと向かってきた。幸い林鳳祥が彼らを一喝して止めさせ、「洞口はすでに破られ、天意は知るべしだ。施一人を殺したところで何になろう」と言った。いま林鳳祥は右臂と左腿に槍傷を受けており、輿に乗らないと動くことが出来ないとのことだった。⁸⁹⁾

また僧格林沁の上奏によると、林鳳祥は潜伏後に脱出を図るべく「長髪を薙去」しており、出てきた時は服毒していたという⁹⁰⁾。清軍は彼を陣地へ送って治療し、北京へ護送のうえ極刑に処した。また彼に最後まで従っていた李隆田（広西桂平県人）らも取り調べを受けた後に処刑された⁹¹⁾。陳思伯は林鳳祥について「もとより小才があったが、ただ勇敢さと力を持つとして、事に遇っては顛預（間が抜けていること）であった」と述べている。また「雪や氷の中で無理に行軍すれば、賊がみな足を痛めると分かっているが、いささかも愛惜を加えずにこれを夜中の泥道へ駆り立て、死んだ悍賊は半ばを越えた⁹²⁾とあるように、強引な作戦によって多くの損失を出したことを批判した。こうして連鎖の林鳳祥軍は壊滅し、残るは高唐州の李開芳軍のみとなった。

(b) 勝保の処罰と馮官屯の戦い

この頃高唐州では李開芳軍の籠城戦がなお続いていた。この間勝保は無策であった訳ではなく、1854年9月下旬に铸造した1万5,000斤の巨砲を1,000名の人夫を動員して砲台に運び込み、城へ向けて発射したが、城壁の一部を破壊しただけで効果は上がらなかった⁹³⁾。また城内を一望できる背の高い砲台を築かせたり、木製の巨大な移動式の盾を作って攻撃する方法を試みたが、いずれも失敗に終わった⁹⁴⁾。とくに10月28日に勝保は火薬数斤を携行した決死隊に城壁を爆破させ、「轟開すること五丈余り」と十数メートルにわたって城壁を崩落させたが、兵力不足と逆風によって突入のチャンスを逃した⁹⁵⁾。

その後勝保は地雷で城壁を爆破するために長いトンネルを掘らせ、1855年2月には「城からおよそ僅か十丈余りであり、事はまさに成ろうとしている⁹⁶⁾と報告した。だがトンネルは太平軍が城外に作った外濠にも達していなかった。張集馨によると、3月7日の黄昏に「突然壁が崩れる音が聞こえ、黒煙があたり立ちこめた。兵勇が走ってきて『トンネルで爆発があり、爆死した弁兵、夫役の数は数え切れない。勝帥（勝保）もケガをされた』と報じた」とある。清軍は地雷攻撃に備えて2万斤の火薬を運び込む作業をしていたが、坑道内の灯りが誤って火薬に引火した。死者は100名以上に及んだが、城壁と太平軍の外濠は無事で、「賊は城上から大声ではやし立て、銅鑼を鳴らした⁹⁷⁾という。

また長期にわたる攻城戦は、清軍に規律の乱れをもたらした。すでに毛鴻賓は9月の上奏で「勝保の陣中は散漫で規律がない。兵勇は外で人の財物を盗み、人の婦女を犯し、至らざるところがない。甚だしい場合は武器を手向党を作って馬に乗り、白昼に村へ乱入しては略奪を働く。遠近の二、三十里で免れた村はない」と告発した。また彼は勝保が派遣する官吏や将校が道々「もてなしを強要して、殆ど暇のない程だった」ことや、各州県から砲台や濠を修築したり、兵糧や武器、火薬を輸送するための人夫を徴発したため、「官民は交々困り、苦累は耐え難かった⁹⁸⁾ことを訴えた。

後に勝保はこれら毛鴻賓の告発について、「勝保が張亮基を弾劾した恨みから、代わって報復しようと望んだ⁹⁹⁾と反論した。だが張集馨は毛鴻賓の訴えは「真偽が相半ば」すると

述べたうえで、吉林兵の略奪に怒った村人が兵を殴ったところ、これを聞いた勝保が兵 300 名を派遣して村を「剿洗」させたのは事実だと述べている。また勝保の陣営付近には娼館や酒店、賭博場、アヘン窟などが建ち並び、兵士ばかりか将校も出入りして「恬として恥じなかった」という。さらに張集馨は四川勇や黄良楷の率いる単県勇の規律が悪かったことに加えて、兵の暴行や人夫の徴発による地元の重い負担については「僧營（僧格林泌の軍）もまたかくの如し」¹⁰⁰⁾であったと記している。実際に 10 月には僧格林泌のもとで「幫辦糧臺」の任務にあった候補道保定同知黄徳坊らが「卑鄙貪汚であり、劣蹟は多端」¹⁰¹⁾などと告発を受けた。

林鳳祥軍を壊滅させた僧格林泌は、3 月 8 日に高唐州へ向かった。彼は黒龍江、吉林などの騎兵 2,550 名、歩兵 2,800 名と投降した義勇 3,000 余名を率いたが、残る 2 万名は経費削減のため原隊へ復帰させた¹⁰²⁾。翌 9 日に咸豊帝は、勝保が「驕り高ぶって怠惰となり、將兵も命令に従わなくなった」ために高唐州弾圧が遅れ、多くの告発を受けていると指摘した。また屢々諭旨を降して勝保に反省を促したが、依然として態度が改まらないため、僧格林泌に「勝保を撃問して、委員を派遣して北京へ護送せよ」¹⁰³⁾と命じた。

3 月 11 日に高唐州に到着した僧格林泌は、命令通り勝保を捕らえて北京へ送った。この時僧格林泌は勝保の「虚心に考えることをせず、功績を貪って軽々しく進んだり、軍中の機密を洩らした」性急で慎重さに欠ける行動こそが將兵を統率出来なかった原因であると指摘した。また「別項の劣蹟は、奴才はなお見聞していない」¹⁰⁴⁾とあるように、毛鴻賓や張集馨が指摘した清軍の腐敗については不問に付した。惠親王綿愉らによる取調べも同じ視点から進められ、勝保は「逆匪が初め高唐を占拠した時、勝保は一時の愚かさから僅かに騎兵二千余名を率いて追撃し、進攻を始めた時に兵が少なく順調に行かなかった。後に増援の兵勇を得たが、賊の守りはいよいよ堅くなった。ただ数百の残寇に対して、勝保は多くの兵を率いて九ヶ月余りも囲み攻めたにもかかわらず、剿滅することができなかった。督辦が遅延した罪は言い訳できず、自ら無能すでに極まることを恨むばかりである」¹⁰⁵⁾と供述した。そして咸豊帝は勝保が懷慶から山西で北伐軍をよく追撃し、北伐援軍を殲滅させた功績を鑑み、彼を新疆へ送って「效力贖罪」させることにした¹⁰⁶⁾。

勝保は北伐軍にとって最大のライバルであった。訥爾經額が処罰され、僧格林泌が戦線に到着するまでの間、彼が 1 人で清軍を支えたと言っても過言ではなかった。彼が「年若く資質が軽く……、人が服さないのを恐れて、往々にして權威をほしいままにした」「諸臣を感情に任せて叱責し、気の向くままに指揮するなど、絶えて相手の意見を受けいれて策を練ることをしなかった。このため大半の者は協力できず、用いた將弁たちも面従腹背だった」¹⁰⁷⁾と告発されたのも、その責任の大きさから見てやむを得ない部分があった。彼が流刑先のイリから戻って捻軍の弾圧にあたり、都統欽差大臣として安徽で再び太平軍と矛を交えるのは 1858 年のことであった¹⁰⁸⁾。なお勝保の解任に伴い、彼が率いていた四川、湖北、河南、江南の練勇 5,000 名も解散させられた¹⁰⁹⁾。

さて勝保に代わって李開芳軍の攻撃を命じられた僧格林沁は、高唐州城が堅固で、軽々しく攻めれば多くの犠牲を出すと思われた。また李開芳は「狡猾なること異常」で、食糧が豊富なのを恃みとして籠城を続けており、必ず彼らを誘って「全股出巢」させなければ打撃を与えられないと考えた¹¹⁰⁾。3月16日に僧格林沁は義勇に太平軍部隊を装わせ、李開芳軍が「開城して迎える」のに乗じて城内へ突入しようと試みたが、李開芳は計略に乗らなかった。だが僧格林沁の到着後、李開芳軍は「毎晩巢を出て道を探」っており、林鳳祥軍の壊滅を知って南への撤退を図っていると思われた。

3月17日夜に僧格林沁は前線の将兵を後方へ下げ、わざと警備を怠っているように見せかけさせた。はたして夜11時過ぎに太平軍は出撃し、清軍がいないのを見て「歡呼雷同して全股が真っ直ぐ南へ向かって逃れた」と高唐州城を脱出した。僧格林沁が騎兵500名に追撃させたところ、太平軍は高唐州から25キロほど離れた荏平県の馮官屯に到着した¹¹¹⁾。この時の様子について李開芳は次のように供述している

私は自分の騎兵全てを率いて東門から逃れ、東南に向かって逃げた。黄河を渡り、それぞれ逃げのびるつもりだった。四、五十里ほど走ったところで、その百姓一人に会い、私は尋ねた「前にあるのは何という場所か?」。彼は「馮官屯だ」と答えた。私は続いて「馮官屯には食糧があるか? 本当のことを言えば、おまえに銀をやるぞ」と尋ねた。するとその男は「馮官屯には食糧が沢山ある」と答えた。私が彼に百両の銀をやるのと、彼は我々を馮官屯へ案内した。我々は一気に中へ入り、馮官屯を占領した……。僧王爺（僧格林沁）も追撃の兵を率いて追いつき、馮官屯を包囲した¹¹²⁾

ここからは高唐州を脱出した李開芳らが黄河を渡河し、一気に江南へ向かうつもりだったことが窺われる。清軍に捕らえられた捕虜も「逆衆八百余名は、濟寧州に向かって逃げようとした」と述べている。彼らが馮官屯に立ち寄ったのは食糧を確保するためで、籠城する意志はなかったが、清軍の追撃が早かったために「村に入って据守」することになった。いわば事態は僧格林沁の思惑通りに展開したと言える。

馮官屯は3つの小村から成っており、周囲に「村を護る深濠」を巡らしていた。3月18日に清軍は後続の騎兵、歩兵と義勇が到着すると、村の西南を攻めて西側の2ヶ村を奪回した。この戦いで「現在は撃殺されて僅かに五百余名を残すのみ」と200名近い損害を受けた李開芳軍は、馮官屯の東南から脱出しようとして試みたが失敗した。清軍は村の周囲に大砲を運び込んで砲撃を加え、翌19日にかけて一気に決着をつけようと攻勢をかけたが、頭等侍衛蘇彰阿らが戦死して敗退した¹¹³⁾。

その後しばらく馮官屯からの脱出を図る李開芳軍と清軍との間で戦闘がくり返された。僧格林沁は連日馮官屯に砲撃を加え、太平軍は「大砲によって殺された者が多く、負傷した者も数知れない」と大きな打撃を受けた。だが太平軍も村内に3重の濠を張り巡らせ、濠の

下に人が入れる穴を掘って砲火を避けると共に、穴から村の外壁に向けて射撃口を穿ち、進攻してくる清軍將兵を地下から狙撃出来るようにした。このため清軍は3月だけで義勇を中心に130名以上の死傷者を出した。

戦況が膠着するのを恐れた僧格林沁は、連鎖で捕虜となった土官將軍の劉自明（湖南人）にトンネルを用いた地雷作戦に協力するように要請した。劉自明は武昌、南京攻略戦で城壁の爆破を担当した経験を持っていた¹¹⁴。だがこの時馮官屯では李開芳が自ら義勇の陣地に近づき、「巧言にて引き誘い、もって衆心を結ぼうと欲した」と太平軍に戻るように説得していた。また「仮意投降」即ちニセの投降者を送り込み、清軍陣地で内応工作を進めた。はたしてトンネルを掘り始めた劉自明は、6名の仲間と共に太平軍陣地へ逃げ込んだ。また太平軍も清軍陣地に向けてトンネルと掘っていることがわかり、僧格林沁は地雷による村壁の爆破を諦めざるを得なかった。

代わりに僧格林沁が採った戦法は、連鎖攻略の時と同じ水攻めであった。彼は馮官屯の外に徒駭河に通じる河川の跡（漢河）があり、河廳、三孔橋で堤防を破れば運河の水を引くことが出来ると突きとめた。そこで2-3,000名の人夫を動員して水路一帯の低地に堤防を築く工事を始めた。もしうまく水が流れれば、馮官屯は水没しなくとも周囲の濠は完全に沈み、太平軍はそこに潜むことが出来なくなると考えたのである¹¹⁵。

この間も李開芳軍は馮官屯からの脱出を図り、4月15日には清軍の砲台前にあった土塁を地雷で爆破した。太平軍がここから「冲出」すると清軍は一時「潰乱」したが、砲台の外側にもう一つ濠があったため、太平軍は包囲を突破することが出来なかった。僧格林沁は兵勇に命じて太平軍が占拠した砲台を奪回させたが、太平軍はなお溝内に残って抵抗を続けた。この日の戦いで清軍は乾清門侍衛都興阿（後に江寧將軍）、護軍參領舒保が重傷を負い、兵勇230名が死傷した¹¹⁶。また4月初めに西征軍が武昌を占領（第3次）し、安徽の清軍が兵力不足となったため、この日僧格林沁は手持ちの兵から4,000名を割いて河南信陽州へ送ることを決めただけだった¹¹⁷。それは粘り強く脱出の道を探っていた北伐軍にとって最後のチャンスであったかも知れない。

4月15日の戦闘後、僧格林沁は「万にやむを得ず、初めて水を用いて浸灌することにした」と水攻めの実施を決め、同時に太平軍の地雷攻撃に備えさせた。4月20日に太平軍は再び3ヶ所で地雷を爆発させたが、清軍はすぐに反撃を加えて太平軍を撃退した。また19日に運河の水を引く工事が完成し、引き込まれた水は清軍陣地の近くに到達した。20日昼に「まず周囲の濠に水が満ち、その後内側へ向かって浸淹した」とあるように馮官屯の周囲が水没した。馮官屯そのものはやや地盤が高く、太平軍の2本の濠が水深1メートル程度まで水没したが、濠の内側の低地は数十センチの水が到達しただけで、太平軍の地下陣地を水没させるには至らなかった。だが「逆匪は水を見て甚だ驚惶」とあるように水攻めは太平軍將兵を大いに驚かせた。21日には太平軍が馮官屯の西北で掘り進めていたトンネルが崩落し、中から火薬を入れた袋などが浮き上がった¹¹⁸。太平軍は水攻めによって地雷攻撃を



图2 「克復馮官屯戰圖」冊8 (「剿辦粵匪戰圖」東洋文庫藏)

封じられたのである。

(c) 李開芳の投降と北伐の終焉

馮官屯を完全に水没させられなかった僧格林沁は、村の周囲の堤防を高くする工事を進め、水車やつるべなどを用いて外から水を流し込む作業を続けた。その結果 10 日後には堤防内の高い場所でも 1 メートルほどの水が溜まり、村内の太平軍陣地も水が入って貯蔵していた穀物が被害を受けた。初めは、落ちついていた太平軍将兵も「水勢が日に長じるのを見て、初めて驚慌」とあるように動揺し始めた。

5 月に入ると李開芳は再び包圍網の突破を試み、5 月 15 日からは連日「大股が出巢」して総攻撃をかけた。とくに 18 日夜には北面の砲台に向かって 5 度攻撃をしかけたが、チャハル都統西凌阿の軍に撃退された。翌 19 日夜に風の強いのを見た清軍は、火毬を装填した砲を太平軍陣地に撃ち込んだところ、貯蔵していた火薬に引火して爆発した。翌日馮官屯を脱出してきた難民の話によれば「砲撃で賊匪数十名が殺され、焼かれた火薬、器械、米穀は数え切れなかった」¹¹⁹⁾ という。

李開芳軍の動揺を見越した僧格林沁は、5 月 25 日に小船を調達し、すでに投降した太平軍将兵に 3 日間の期限つきで「投誠する者は罪を免ず」と呼びかけさせた。すると翌日までに蔡連修（湖広人）ら 220 名余りが降伏した¹²⁰⁾。彼らは馮官屯の太平軍陣地が「地遍く皆水であり、ただ二、三丈の乾いた場所があって李開芳の寢床になっているが、他の賊はみな泥の中にいる」と供述した。また食糧はあるが、粃殻を杵でつく場所がない。最も深刻なのは飲料水がないことで、泥水は糞尿と混じって汚れ、これを飲んだ者は皆疫病にかかって死んだと語ったという¹²¹⁾。僧格林沁は彼らを堤防の内側に留めて水管を編制し、「賊を攻めて贖罪」させることにした。

5 月 28 日に李開芳は降伏を求める書状を僧格林沁に送った。僧格林沁がこれを認めると、先鋒指揮の黃近文が率いる太平軍将兵 140 名が難民に混じって馮官屯から出てきた。だが先に投降した湖広人将兵から「該逆は現在木牌、長ハシゴを造っており、決死の覚悟で奔撲しようとしている」と聞いていた僧格林沁は、「外観からを推し量るに、実に偽りの投降である」と判断し、難民を地方官に引き渡した後に彼らを皆殺しにした。また村内の太平軍が警戒を解くのを見計らい、「密かに号令を伝えて」一斉に攻撃をかけた。李開芳はこれに応戦し、村の近くまで迫った清軍を撃退した。

翌 29 日から 2 日間、清軍は大砲を用いて攻撃を続けた。この間も李開芳は使者を清軍陣地へ送り、「その一路を譲って南省へ逃げるのが出来れば、決して再び北犯しない」と談判を試みたが、僧格林沁は応じなかった。いよいよ「万難支えがなくなった」李開芳は、ついに 5 月 31 日に投降した¹²²⁾。姚憲之『粵匪南北滋擾紀略』はこの時の模様について「遙かに数十人が紅の傘を差し、[李] 開芳を護衛して出てくるのが見えた。僧邸（僧格林沁）は彼らが南へ向かって逃げるのではないかと恐れ、数万人を左右に陣取らせて待ち構えた」¹²³⁾

とあるように、清軍が彼らを厳戒態勢で迎えたと伝えている。また陳思伯『復生録』によると、僧格林沁は船に乗った義勇を馮官屯に向かわせ、最後まで残った 100 名近くの太平軍將兵を拘束したとある。

投降後の李開芳は僧格林沁に面会した。この時の様子について陳思伯は「一切を婉曲に報告し、林逆（鳳祥）が傲慢不遜に王（僧格林沁）に見え、立ったまま跪かなかったのとは違っていた」¹²⁴⁾と記した。張集馨も僧格林沁の幕営に入ってきた李開芳が「跪いて小的（わたくしめ）と言った」¹²⁵⁾と述べている。だが姚憲之によると、2名の侍衛を伴って入ってきた李開芳は「僅かに僧王（僧格林沁）、貝子（德勒克色楞）各大人に向かって一度膝を屈した」ものの、周囲に居並ぶ武官たちにも全く恐れる様子はなく、ただ「罪を許して頂ければ、金陵の諸將を投降させましょう」と言った。そして食事を与えられると「うち解けて大いに食べ、笑い話すこと普段通りであった」¹²⁶⁾と記している。

この李開芳が僧格林沁との会見で見せた態度は、命乞いあるいは南京へ帰還するための偽装投降など様々な解釈を可能にしている。張集馨はこの時僧格林沁が「なんじの投降を許したからには、わしは決してなんじを殺さぬ。いずれわしはなんじを従えて共に江南へ行き、功績を上げようと思う。江南を平定するうえで、なんじに何か計略があるか？」と恩赦を匂わせる発言をしたところ、李開芳は「江南の瓜 [洲]、鎮 [江] 各陣地は、私なら降伏させることが出来る。もし専ら兵力に頼るようなら上手く行かないだろう」¹²⁷⁾と答えたと言っている。さらに李開芳の供述書は次のように述べている

僧王爺（僧格林沁）の陣中では「別省の脅されて従った者が投降すれば殺さないが、ただ広西人は降伏しても罪を赦さない」との命令が出ていた。だがもし広西人が降伏しても罪を免じて殺さなければ、広西人は何を無理して降伏しない筈があろうか。もし広西人が次々と降伏すれば、南京を破ることも難しくはない。もし私を派遣して南京を攻めさせるなら、私はまず一人の広西人を送り込んで「李開芳はすでに投降して大官になった」と宣伝させよう。南京の偽官たちは必ず皆投降してくる。偽官たちが逃げてしまえば城内は必ず乱れ、洪秀全、楊秀清も簡単に捕らえることができる。

これに続けて李開芳は、投降した北伐軍の將軍に沙廷富なる人物がおり、もし生きているなら自分は彼を南京へ潜入させ、秦日綱らを説得出来ると述べている¹²⁸⁾。彼の話の聞いた僧格林沁は「その心は測りがたいと考え、あえて深く追究しなかった」¹²⁹⁾とあるが、その実李開芳が表明したのは湖広人を初めとする途中参加者に降伏を勧め、彼らに義勇を組織させて専ら広西人を攻撃させた僧格林沁の戦略がもたらした効果の大きさであった。太平天国の滅亡後に忠王李秀成も「清朝がもっと早く広西の人を赦していれば、とうの昔に解散していただろう」¹³⁰⁾と供述したが、この蜂起参加の時期や出身地に基づくヒエラルキー構造こそは太平軍の特徴であり、同時に弱点でもあった。その後連鎮と馮官屯の戦いで活躍した元太平

軍兵士の義勇部隊 1,800 名は西凌阿の統率のもとで湖北徳安へ送られ、忠義勇に再編成されて西征軍との戦いに用いられた¹³¹⁾。その成果は必ずしも順調ではなかったが¹³²⁾、広西、広東人の横暴を非難して他省出身者を自分たちの陣営に引き寄せる努力はその後も続けられた。つまり北伐軍の壊滅は太平軍といかに戦うべきかを清朝に認識させる絶好の機会を与えたのである。

小 結

本稿は太平天国の北伐軍が壊滅する過程について分析を行った。援軍との合流に失敗した北伐軍は、林鳳祥の連鎮、李開芳の高唐州に分かれて籠城戦を続けた。初め追撃の軍を率いて高唐州へ向かった勝保は、1,000 名に満たない李開芳の一隊を容易に殲滅出来ると考えた。しかし李開芳は州城を要塞化して清軍の度重なる攻撃を却け、戦いは膠着状態に陥った。だが李開芳も新たな援軍要請あるいは勢力の拡大という本来の任務は達成できず、連鎮の本隊との連絡も途絶えたまま籠城を続けることになった。

いっぽう連鎮では林鳳祥が僧格林沁の大軍と向かい合っていた。ここを包囲する清軍も太平軍の厚い防禦に攻めあぐみ、多くの犠牲を出したため、僧格林沁は運河の水を引いて連鎮を水没させる戦略を思いついた。彼は咸豊帝の叱責にもかかわらず水攻めの準備を進め、最後は大雨で堤防が決壊したことも手伝ってこの計画は実現した。そして林鳳祥軍は東連鎮の倉庫が浸水して深刻な食糧不足に陥った。

これ以後林鳳祥軍は連鎮からの脱出を図り、清軍陣地に対する攻撃を執拗にくり返した。その戦法は夜襲から木梯子、呂公車あるいは船を使った攻撃と知恵の限りを尽くしたが、どうしても清軍の包囲を突破することは出来なかった。その間も太平軍陣地内の食糧不足は深刻化したが、広西出身の幹部とその他の将兵との間には待遇の差が歴然として残り、その結果湖南、湖北など途中からの参加者で投降する者が現れた。

僧格林沁はこの変化を見逃さず、彼らに太平軍陣地の非広西人に投降を呼びかけさせた。また彼らの高い戦闘能力に注目し、義勇を編制して攻撃の矢面に立たせた。林鳳祥は将兵の逃亡を厳しく禁じたが、投降しても殺されないことを知った非広西出身者は集団で脱走するようになった。1855 年 3 月について連鎮は陥落したが、最後まで林鳳祥のもとに残ったのは多くが広西出身者と北伐の進撃中に新たに加わった反体制勢力であった。林鳳祥は地下に潜伏していたところを捕らえられ、北京へ送られて殺された。

その頃高唐州では李開芳と勝保の戦いがなお続いていた。この間勝保も無策であった訳ではなく、大型砲による砲撃やトンネルを用いた地雷作戦など様々な作戦を試みた。だがそれらは悉く失敗し、兵勇が厭戦気分になったために李開芳軍に打撃を与えることができなかった。連鎮の陥落後、僧格林沁はすぐに高唐州へ向かい、勝保は革職鞫問となって新疆へ送られた。僧格林沁も高唐州城を攻める良策を持っていなかったが、連鎮の陥落を知った李開芳は南進をめざして高唐州を脱出し、全軍が出撃したところを痛撃するという僧格林沁の戦略

は図らずも実現した。

李開芳が最後に拠点としたのは馮官屯であった。ここを包囲した僧格林沁は再び水攻めを行うことを決め、馮官屯の周囲に高い堤防を築き、遠く大運河から水を引いて村を水没させた。その結果太平軍は地下のトンネルが崩落して地雷攻撃を封じられ、脱出の希望は完全に絶たれた。また食糧と水の不足に苦しみ、不衛生な環境の中で死者が続出した。5月末に李開芳は軍の撤退について談判しようと試みたが、僧格林沁はこれに応じなかった。そしてついに李開芳も降伏したのである。

降伏後、僧格林沁に引き合わされた李開芳は、なお虚々実々の駆け引きを行った。むろん「広西人は降伏しても罪を赦さない」という清軍の方針を聞いていた李開芳は、命乞いが認められないことをよく知っていた。にもかかわらず彼が広西人の投降を認めることが南京攻略の早道であり、自分を派遣すれば南京城内の広西人将兵を説得できると献策したのは、自分が南京へ戻る僅かな可能性を見ようとしたのかも知れない。だがこのやりとりから浮かび上がる一つの事実は、非広西人の投降を積極的に認め、彼らの能力を活用して太平軍を攻めさせる僧格林沁の戦略が北伐軍に与えたダメージの大きさであった。それは湖南、湖北出身者を含む「老兄弟」の強い結束によって軍内の秩序と高い戦闘力を維持してきた太平軍の組織に亀裂をもたらし、広西人を孤立させることで勝利が可能となることを清軍に教えたのである。

こうして2年間におよぶ太平天国の北伐はここに幕を閉じた。すでに多くの論者が指摘しているように、北京攻略をめざして清朝の支配地域だった華北を転戦した北伐軍の活動は困難の連続であった。その兵力は独流、静海県到達時には3万人を数えたが、南京進撃時のような大量の参加が見られた訳ではなかった。また彼らは黄河下流で渡河することが出来ず、懷慶攻防戦で時間を浪費するなど戦略上の誤りも多かった。さらに満洲人とその協力者に対する排撃を唱えた上帝教の不寛容な教義によって、北伐軍は進撃の途中2度の虐殺事件を起こした。これに華北の人々の根強い反感も加わり、北伐軍は「孤軍深入」¹³³⁾即ち敵軍深く孤立したまま行軍することを余儀なくされた。

だがこうした制約にもかかわらず、北伐軍は勇敢かつ大胆な行動力で直隸省へ進出した。清軍は彼らの迅速な行軍に追いつくことができず、抵抗を試みた部隊は準備不足や連携の悪さから次々と撃破された。むしろ清軍で盛んだったのは司令官の内紛や非難合戦であり、欽差大臣だった訥爾經額と勝保、巡撫として迎撃の任務に当たった陸應穀、哈芬、張亮基らは皆処罰を受けた。もし北伐軍が深州で引き続き北進するか、天津到着後も間髪を入れず前進していたら、一時的であれ北京を攻略することは可能だったかも知れない。

だが結局北伐軍は北京進攻を行わなかった。彼らは天津郊外で援軍を待ったが、南京の太平天国首脳部は北京の清軍兵力を過大評価した密偵の報告によって援軍の派遣に慎重となり、その出発は1854年2月まで遅れた。独流、静海を離れた北伐軍は保定で曾立昌の援軍と合流する予定であったが、東城村への行軍で多くの将兵が凍傷となり、阜城県への移動で

は雪融けの泥に身動きが取れなくなった。僧格林沁の追撃で痛手を受けた北伐軍は5月にようやく連鎖へたどりついたが、合流すべき援軍はすでに臨清で敗退していた。以後連鎖と高唐州で籠城を続けた北伐軍の最後は本稿が検討した通りである。

それにしてもなぜ太平天国の首脳たちはもっと早く援軍を送らなかったのか？ 北伐軍の出発時に一部の軍は敗北して南京へ戻っており、黄河を渡河出来なかった南返軍が安慶へ帰還した時にも援軍の必要性はある程度予想出来た筈である。その一つの手がかりは太平天国滅亡の原因を記した李秀成の「国を誤らせた第一は、東王が李開芳、林鳳祥に北を掃させて敗北した大失敗」¹³⁴⁾という供述で、北伐の計画そのものが楊秀清の強いイニシアティブのもとで決定されたことを示唆している。『天父聖旨』は北伐軍が連鎖、高唐州で苦戦していた1854年9月に「東王の靈魂は各処に行つて、大いに妖魔と戦ひ、妖魔を誅殺すること無数であった。まゝ網に漏れて殺せなかつた者もいたが、悉く遠く他方へ逃れた」¹³⁵⁾と記しており、少なくとも彼は北伐の戦局について関心と指揮の権限を持っていたことがわかる。

援軍の敗退後、1854年6月に楊秀清が北伐軍の救援を命じた燕王秦日綱の軍は、安徽舒城県で福建陸路提督秦定三の率いる清軍と団練に行く手を阻まれた。その実彼は「北進を願わず、楊賊（秀清）に北路の官軍が大変多く、兵が少なく行き難いと報告した」¹³⁶⁾とあるように、楊秀清の命令に従って北進することを望まなかった。当時の太平天国で高まりつつあった楊秀清の専制に対する不満は、彼の指揮する作戦活動に人々が協力しないという現象を生んだのであり、それは北伐軍救援という困難な任務であるほど顕著に表れた。李開芳が自分であれば秦日綱を投降させることが出来ると述べたのは、秦日綱が天京事変で楊秀清を殺害した「反楊秀清派」だった事実を考えた時に示唆的である。つまり北伐軍に対する救援の遅れは、太平天国が挙兵時の勢いを失い、非効率的な専制王朝へ転化しつつあったことを示していると言えよう。

こうした問題点をかかえ、大きな犠牲を払った北伐であったが、それが後世の歴史に与えた影響を否定することは出来ないだろう。T. Meadows は次のように述べている。

太平軍が南京から静海まで進撃した距離は1,300から1,400マイルに及ぶが、彼らが南京対岸の長江北岸を出発した日から、後方の友人たちとの連絡は変装した使者によって維持された通信を除いて全く途絶えていた。彼らは南京と鎮江の近くで監視の任務に当たっていた清軍から派遣された部隊に追尾されており、これとは別に行く先々で各地の地方軍が背後に迫っていた。だがこの軍は驚くべきことに、かくも孤立しながらも粘り強く北へ向かって進路を取り、苛酷な気候、戦うほどに数が増え強力になる敵によって積み上げられた幾多の困難にもかかわらず、初めは西、次いで東へ大きく進路を変えながら、6ヶ月ものあいだ決して南へ退くことをしなかった。この驚くべき光景こそは、太平軍組織の強さよく物語っている。

これに続けて Meadows は、林鳳祥らが決して太平天国前期の中心的指導者である五王のメンバーではなかったにもかかわらず、その献身的な努力によって「この大胆で危険に満ちた攻撃を満洲王朝の本拠地で実行した」¹³⁷⁾ ことに賞賛を送っている。かくも困難な戦いの中で、最後まで勝利の可能性をあきらめなかった彼らの足跡は、太平天国史の最も輝かしい記憶として孫文の北伐へと受け継がれることになったのである。

註

- 1) 菊池秀明「太平天国の北伐前期における諸問題 南京から懷慶まで」国際基督教大学社会科学研究所編『社会科学ジャーナル』55号、2005年。
- 2) 菊池秀明「太平天国の北伐中期における諸問題 山西から天津郊外まで」国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』33号、2006年。
- 3) 菊池秀明「太平天国北伐軍の敗退と援軍の臨清攻撃」(未発表)。
- 4) 簡又文『太平天国全史』第九章、北伐軍戦史、香港猛進書屋、1962年、557頁。
- 5) 張守常『太平天国北伐史』(張守常・朱哲芳『太平天国北伐・西征史』広西人民出版社、1997年所収)。張守常『太平軍北伐叢稿』齊魯書社、1999年。
- 6) 崔之清等編『太平天国戦争全史』2、戦略発展、南京大学出版社、2002年。
- 7) 堀田伊八郎「太平天国の北征軍について その問題点の一考察」『東洋史研究』36巻1号、1977年。
- 8) 中国第一歴史档案馆編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』(以下『鎮圧』と略記)第6-17輯、1992-1995年。中国社会科学院近代史研究所主編、張守常編『太平軍北伐資料選編』齊魯書社、1984年。中国第一歴史档案馆編『軍機処奏摺録副』農民運動類、太平天国項、第9巻。
- 9) 僧格林沁等奏、咸豊四年五月初三日『鎮圧』14、220頁。勝保奏、咸豊四年五月初四日、同書232頁。その兵力については李開芳供詞(咸豊五年四月)に「六百三十多人」(中国第一歴史檔案館編『清代檔案資料叢編』5、中華書局、1980、166頁)とある。
- 10) 崇恩奏、咸豊四年五月初八日『鎮圧』14、279頁。また光緒『高唐州志』巻2之2、建置考、兵萃考略によると、知州魏文翰は先任山東巡撫張亮基から住民が虐殺に遭った臨清の教訓を活かすように諭され、城門を開いて人々を避難させた。また太平軍が進攻すると守備吉琳、千総劉万化は逃亡し、団紳の杜維屏(生員)は戦死した。
- 11) 勝保奏、咸豊四年五月初六日『鎮圧』14、261頁。
- 12) 勝保奏、咸豊四年五月初四日『鎮圧』14、232頁。
- 13) 綿愉等奏續訊李開芳等人供詞摺『清代檔案資料叢編』5、168頁。
- 14) 李開芳供詞『清代檔案資料叢編』5、166頁。
- 15) 僧格林沁等奏、咸豊四年五月初七日『鎮圧』14、268頁および同奏の硃批部分。
- 16) 勝保奏、咸豊四年五月初九日『鎮圧』14、281頁。
- 17) 勝保奏、咸豊四年五月十六日『鎮圧』14、337頁。
- 18) 勝保奏、咸豊四年五月二十四日『鎮圧』14、424頁。
- 19) 勝保奏、咸豊四年六月初八日『鎮圧』14、529頁。
- 20) 勝保奏、咸豊四年五月二十四日『鎮圧』14、424頁。
- 21) 綿愉等奏續訊李開芳等人供詞摺『清代檔案資料叢編』5、168頁。
- 22) 張集馨『道咸宦海見聞録』中華書局、1981年、151頁。

- 23) 毛鴻賓奏、咸豐四年閏七月二十七日、軍機處奏摺録副、農民運動類 8469-32 号、中国第一歴史檔案館蔵（『清代檔案資料叢編』5、219 頁）。
- 24) 張集馨『道咸宦海見聞録』151 頁。
- 25) 毛鴻賓奏、咸豐四年閏七月二十七日『清代檔案資料叢編』5、219 頁。
- 26) 勝保親供、咸豐四年二月十五日『清代檔案資料叢編』5、222 頁。
- 27) 勝保奏、咸豐四年七月十九日『鎮圧』15、66 頁。
- 28) 勝保奏、咸豐四年六月二十五日『鎮圧』14、617 頁。
- 29) 勝保奏、咸豐四年七月十九日『鎮圧』15、66 頁。
- 30) 勝保奏、咸豐四年六月二十五日『鎮圧』14、617 頁。
- 31) 軍機大臣、咸豐四年七月十四日『鎮圧』15、33 頁。
- 32) 勝保奏、咸豐四年七月十九日『鎮圧』15、64 頁。
- 33) 勝保奏、咸豐四年七月十九日『鎮圧』15、66 頁。
- 34) 勝保奏、咸豐四年六月初八日『鎮圧』14、529 頁。
- 35) 勝保奏、咸豐四年閏七月初十日『鎮圧』15、207 頁。
- 36) 勝保奏、咸豐四年七月十九日『鎮圧』15、70 頁。
- 37) 諭内閣、咸豐四年七月二十二日『鎮圧』15、83 頁。
- 38) 勝保奏、咸豐四年七月三十日『鎮圧』15、136 頁。
- 39) 勝保奏、咸豐四年閏七月十五日『鎮圧』15、245 頁。
- 40) 勝保奏、咸豐四年閏七月初十日『鎮圧』15、205 頁。
- 41) 綿愉等奏續訊李開芳等人供詞摺『清代檔案資料叢編』5、168 頁。
- 42) 勝保奏、咸豐四年閏七月初十日『鎮圧』15、207 頁によると、清軍は「出城探西南路徑」の王西牛（李開芳軍の排刀手）を捕らえた。また載齡奏、咸豐四年五月二十日『鎮圧』14、382 頁も「高唐州逆匪遣其送信、令連鎮逆匪竄至高唐州」の太平軍密偵を捕らえたという。
- 43) 陳思伯『復生録』（羅爾綱・王慶成主編『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』4、広西師範大学出版社、2005 年、349-350 頁）。「太平軍連鎮被圍困」『太平軍北伐資料選編』666 頁。
- 44) 僧格林沁等奏、咸豐四年五月二十日『鎮圧』14、382 頁。
- 45) 軍機大臣、咸豐四年五月二十二日『鎮圧』14、410 頁。
- 46) 僧格林沁等奏、咸豐四年五月二十六日『鎮圧』14、451 頁。
- 47) 僧格林沁等奏、咸豐四年六月初一日『鎮圧』14、489 頁。
- 48) 僧格林沁等奏、咸豐四年五月二十日・同二十六日『鎮圧』14、382, 451 頁。
- 49) 軍機大臣、咸豐四年五月二十八日『鎮圧』14、468 頁。
- 50) 軍機大臣、咸豐四年六月初三日『鎮圧』14、502 頁。
- 51) 僧格林沁等奏、咸豐四年六月十三日『鎮圧』14、564 頁。また勝保もこの作戦について「未必有傷於賊、軫恐有害於我」と反対した（勝保奏、咸豐四年六月二十五日、同書 619 頁）。
- 52) 僧格林沁等奏、咸豐四年六月十八日・三十日『鎮圧』14、595, 634 頁。
- 53) 僧格林沁等奏、咸豐四年六月二十二日『鎮圧』14、610 頁。
- 54) 「太平軍連鎮被圍困」『太平軍北伐資料選編』666 頁。
- 55) 僧格林沁等奏、咸豐四年七月二十七日『鎮圧』15、118 頁。
- 56) 僧格林沁等奏、咸豐四年閏七月初六日『鎮圧』15、181 頁。
- 57) 僧格林沁等奏、咸豐四年閏七月十一日『鎮圧』15、216 頁。
- 58) 僧格林沁等奏、咸豐四年閏七月二十四日『鎮圧』15、286 頁。

- 59) 僧格林沁等奏、咸豊四年八月初二日『鎮庄』15、313頁。
- 60) 僧格林沁等奏、咸豊四年八月初五日『鎮庄』15、347頁。
- 61) 陳思伯『復生録』『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』4、349-350頁。
- 62) 僧格林沁等奏、咸豊四年八月十一日『鎮庄』15、404頁。
- 63) 僧格林沁等奏、咸豊四年八月二十九日『鎮庄』15、512頁。
- 64) 僧格林沁等奏、咸豊四年九月初六日『鎮庄』15、512頁。
- 65) 僧格林沁等奏、咸豊四年九月二十五日『鎮庄』15、644頁。
- 66) 陳思伯『復生録』『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』4、350頁。
- 67) 僧格林沁等奏、咸豊四年九月二十九日『鎮庄』16、1頁。
- 68) 僧格林沁等奏、咸豊四年九月二十五日『鎮庄』15、644頁。
- 69) 僧格林沁等奏、咸豊四年九月二十九日『鎮庄』16、1頁。
- 70) 軍機大臣密寄、咸豊四年九月初一日『鎮庄』15、517頁。
- 71) 僧格林沁等奏、咸豊四年十月初七日『鎮庄』16、32頁。
- 72) 僧格林沁等奏、咸豊四年十月二十一日『鎮庄』16、122頁。
- 73) 僧格林沁等奏、咸豊四年十一月初六日『鎮庄』16、231頁。
- 74) 僧格林沁等奏、咸豊四年十一月二十四日『鎮庄』16、393頁。またこの戦いでの死傷者については同奏、咸豊四年十二月初四日、同書492頁。
- 75) 僧格林沁等奏、咸豊四年十一月二十四日『鎮庄』16、393頁。
- 76) 陳思伯『復生録』『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』4、350頁。
- 77) 僧格林沁等奏、咸豊四年十一月二十四日『鎮庄』16、393頁。
- 78) 僧格林沁等奏、咸豊四年十二月初六日『鎮庄』16、492頁。黄益沅は黄益峰の族兄で、金田蜂起時に百長、道州で監軍となり、南京で総制になった、揚州から南京へ戻って指揮となり、北伐参加後は連鎮で検点になったが、1月に戦死した(綿愉奏審録林鳳祥等人供詞摺、咸豊五年正月所収の黄益峰供『清代檔案史料叢編』5、162頁)。
- 79) 僧格林沁等奏、咸豊四年十二月初六日『鎮庄』16、492頁。だがその後山東出身の囚人兵がこの男を殺し、銀を奪い返したという。
- 80) 僧格林沁等奏、咸豊四年十二月二十七日『鎮庄』16、661頁。
- 81) 陳思伯『復生録』『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』4、351-352頁。
- 82) 僧格林沁等奏、咸豊四年十二月二十七日『鎮庄』16、661頁。また郭廷以『太平天国史事日誌』台湾商務院書館、1976年、373頁は詹啓倫が2月13日に投降したと記している。
- 83) 陳思伯『復生録』『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』4、352頁。
- 84) 僧格林沁等奏、咸豊四年十二月二十七日『鎮庄』16、661頁。
- 85) 僧格林沁等奏、咸豊四年十二月二十七日『鎮庄』16、664頁。
- 86) 僧格林沁等奏、咸豊五年正月十六日『鎮庄』17、30頁。
- 87) 陳思伯『復生録』『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』4、352頁。
- 88) 僧格林沁等奏、咸豊五年正月十九日『鎮庄』17、39頁。
- 89) 陳思伯『復生録』『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』4、353頁。
- 90) 僧格林沁等奏、咸豊五年正月二十日『鎮庄』17、43頁。
- 91) 綿愉奏審録林鳳祥等人供詞摺。同奏によれば、他に孟新隆(桂平県人)、將軍陳亜末(広東帰善県人)、副將軍欧錦(広西象州人)、江有信(桂林人)、農六一(象州人)などが捕らえられた(『清代檔案史料叢編』5、162頁)。

- 92) 陳思伯『復生録』『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』4、353頁。
- 93) 張集馨『道咸宦海見聞録』152頁。また勝保によると、この大型砲は「一時未遽轟破、而砲力較大、所擊之処礮石摧裂、頗異尋常。時間城上賊衆号叫之声、甚形警懼」と太平軍を驚かせたが、連日砲撃したところ「因倉猝趕造、鉄性未淨、吃藥過多、是以砲口炸裂、未敢再用」とあるように砲口が破裂して使用不能になったという（勝保奏、咸豊四年八月初二日・八月二十四日『鎮圧』15、315、477頁）。
- 94) 張集馨『道咸宦海見聞録』152頁。この間勝保は元々率いていた歩兵6,000名のうち、高唐州へ連れてきた兵が1,400名に過ぎず、当てにしていた山東兵が各地の拠点防衛のために動員できなかったと述べ、北伐援軍の平定時に兵力を撤去したのは誤りだったと自己批判した（勝保奏、咸豊四年八月十二日『鎮圧』15、419頁）。
- 95) 勝保奏、咸豊四年九月初七日『鎮圧』15、562頁。張集馨『道咸宦海見聞録』152頁。
- 96) 勝保奏、咸豊五年正月初三日『鎮圧』17、1頁。
- 97) 張集馨『道咸宦海見聞録』156-157頁。
- 98) 毛鴻賓奏、咸豊四年閏七月二十七日『清代檔案資料叢編』5、213頁。
- 99) 勝保親供、咸豊五年二月十五日『清代檔案資料叢編』5、229頁。
- 100) 張集馨『道咸宦海見聞録』158頁。
- 101) 軍機大臣、咸豊四年八月初六日『鎮圧』15、369頁。また僧格林沁奏、咸豊四年八月十一日、同書404頁は黄徳坊らの嫌疑を否定している。
- 102) 僧格林沁等奏、咸豊五年正月二十日『鎮圧』17、43頁。この外に僧格林沁は欽差大臣托明阿の要請を受けて兵2,000名を揚州戦線へ向かわせた。
- 103) 軍機大臣、咸豊五年正月二十一日『鎮圧』17、45頁。
- 104) 僧格林沁奏、咸豊五年正月二十四日『鎮圧』17、55、56頁。
- 105) 綿愉等奏、咸豊五年二月二十二日『鎮圧』17、137頁。なお勝保親供、咸豊五年二月十一日は「当該逆初踞（高唐）州城之時、勝保若將自豊件帶回連鎮之馬、歩各隊一万余名、概行撤調來營、併力圍攻、於克復高唐、自必較易爲力。惟連鎮南面空虚、勝保不敢顧此失彼、是以僅將步隊二千余名調赴高唐。此勝保一時糊塗、以致進攻之初、兵單未能得手、後雖統調兵力、而賊守更堅」と述べ、北伐援軍の鎮圧に使った兵力を活用できず、連鎮出發時に僅かな歩兵しか率いなかったことが苦戦の原因であるとの見解を改めて主張した。また勝保がいつも連鎮の戦況と「較量先後」していた理由を正されると、「勝保愚見、以爲雖分兩處軍營、仍屬共辦一事」であり、「故奏報内每與連鎮情形、相提並論、別無他見」と述べて僧格林沁への対抗心はなかったと供述した（『清代檔案資料叢編』5、221、230頁）。
- 106) 諭内閣、咸豊五年二月二十二日『鎮圧』17、139頁。
- 107) 毛鴻賓奏、咸豊四年閏七月二十七日『清代檔案資料叢編』5、213頁。
- 108) 『清史稿』卷403、列伝190、中華書局、1977年、11873頁。
- 109) 崇恩奏、咸豊五年二月初三日『鎮圧』17、82頁。また陳思伯『復生録』は「僧王一到、訪問城賊與兵暗通買賣、即時鎖拏統帥勝保押解進京、將川楚各勇一概裁撤、遣發回南」とあり、僧格林沁は彼らが太平軍と通じていると聞いて即刻解散させたと述べている（『中国近代史資料叢刊続編・太平天国』4、353頁）。
- 110) 僧格林沁奏、咸豊五年正月二十四日『鎮圧』17、56頁。
- 111) 僧格林沁等奏、咸豊五年二月初三日『鎮圧』17、79頁。
- 112) 李開芳供詞、咸豊五年四月『清代檔案資料叢編』5、166頁。

- 113) 僧格林沁等奏、咸豊五年二月初三日『鎮庄』17、79頁。
- 114) 僧格林沁等奏、咸豊五年二月初八日『鎮庄』17、92頁。
- 115) 僧格林沁等奏、咸豊五年二月二十五日『鎮庄』17、159頁。姚憲之『粵匪南北滋擾紀略』によると工事は已革左江道張祥普が担当し、水路の全長は60キロ強、築いた堤防の総延長は22,176丈で、総工費は京帑5万2,000余貫という（『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』4、92頁）。
- 116) 僧格林沁等奏、咸豊五年二月二十九日『鎮庄』17、174頁。この戦いで義勇の勇目寧宗揚が太平軍陣地に拉致されて殺されたという（同奏、咸豊五年三月十七日、同書207頁）。
- 117) 僧格林沁等奏、咸豊五年二月二十九日『鎮庄』17、175頁。
- 118) 僧格林沁等奏、咸豊五年三月十七日『鎮庄』17、207頁。また陳思伯『復生録』によると、この冠水によって崩落した太平軍のトンネルは20ヶ所以上に及んだ。これを知った僧格林沁は「二十余処地道、火薬同時轟發、不知傷人若干」と述べて喜んだという（『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』4、354頁）。
- 119) 僧格林沁等奏、咸豊五年四月初九日『鎮庄』17、267頁。
- 120) 僧格林沁等奏、咸豊五年四月十六日『鎮庄』17、296頁。
- 121) 張集馨『道咸宦海見聞録』162頁。
- 122) 僧格林沁等奏、咸豊五年四月十六日『鎮庄』17、296頁。
- 123) 姚憲之『粵匪南北滋擾紀略』『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』4、92頁。
- 124) 陳思伯『復生録』『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』4、354頁。
- 125) 張集馨『道咸宦海見聞録』163頁。
- 126) 姚憲之『粵匪南北滋擾紀略』『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』4、92頁。
- 127) 張集馨『道咸宦海見聞録』163頁。
- 128) 李開芳供詞、咸豊五年四月『清代檔案資料叢編』5、166頁。
- 129) 姚憲之『粵匪南北滋擾紀略』『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』4、92頁。
- 130) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補版、中国社会科学出版社、1995年、159頁。
- 131) 西凌阿奏、咸豊五年六月二十四日『鎮庄』17、424頁。うち2月に投降した詹起倫は太平軍占領下の武漢で「坐探」として活躍した（詹起倫等稟、咸豊五年五月二十二日、同書388頁）。
- 132) 姚憲之『粵匪南北滋擾紀略』によると、湖北に戻ると義勇の多くは「逃帰賊巢」してしまい、西凌阿はこれが原因で革職留任の処分を受けたとある（『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』4、93頁）。実際に徳安平林市の戦いで邢興未、周春和ら4-500名は「衆兄弟還要吃天父的飯」と叫んで太平軍の陣営に投じ、これを止めようとした勇目徐錫九らに襲いかかった（西凌阿奏、咸豊五年七月初五日『鎮庄』17、448頁）。簡又文氏は彼らを最後に「帰隊」した北伐軍であると評している（簡又文『太平天国全史』第九章、北伐軍戦史、655頁）。
- 133) 洪仁玕供詞、同治三年九月二十七日『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』2、410頁。
- 134) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補版、382頁。
- 135) 『天父聖旨』巻3、甲寅四年八月二十四日『中国近代史資料叢刊統編・太平天国』2、331頁。
- 136) 張德堅『賊情彙纂』巻2、劇賊姓名下、中国史学会主編『中国近代史資料叢刊・太平天国』3、神州国光社、1952年、50頁。江南提督和春の上奏によると秦日綱の軍は約2万人で、「由金陵、安慶、桐城前來救援、並解廬州之圍、即圍北竄」であった。これに対して秦定三の清軍は3,000名に満たず、数千名の団練を併せてもこれを突破して北上することは可能であった（和春奏、寛保四年七月初九日・七月十五日『鎮庄』15、6、45頁）。
- 137) Thomas Taylor Meadows, *The Chinese and their Rebellions: Viewed in Connection with their National*

Philosophy, Ethics, Legislation and Administration to Which is Added, an Essay on Civilization and its Present State in the East and West, London: Smith, Elder, 1856, p. 178.